河原宿（かわらじゅく）の大日如来（だいにちにょらい）さま

登場人物

ナレーター

中村弥四郎（なかむら やしろう）

吉次郎（きちじろう）

供（とも）の者（もの）1

供（とも）の者（もの）2

町（まち）の人（ひと）1

町（まち）の人（ひと）2

町（まち）の人（ひと）3

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

ナレーター

河原宿の火の見やぐらのそばに、古びた小さな大日堂がたっています。お堂の中には菊のご紋のついた高さ一メートルほどのおずしがおかれていますが、おずしのとびらにはかぎがかけてあります。それはやたらにおずしの中をのぞいたり、持ち出したりしないようにとの言いつたえがあるからです。このおずしにはこんな話がつたわっています。

むかし、羽柴秀吉がときの天皇から豊臣の姓をいただき太政大臣になったとき、いっしょに大日如来像をいただきました。秀吉はこの大日如来像を自分の守り本尊とさだめ、ふかく信心していました。そして小姓の中村弥四郎にまもらせ、たいせつにしてきたのでした。

秀吉がなくなり、やがて大坂城はいくさでほのおにつつまれ、落城してしまいます。

このいくさの最中のことです。もえさかる火の中で弥四郎は、たいせつにお守りしてきた大日如来さまをもやしてしまってなるもの

かと、ひっしになって城の外へはこびだそうとしていました。いつもそばに仕える吉次郎やおともの者たちもけんめいに火の海をかいくぐっていました。

弥四郎　弥四郎たちはやっとの思いで城をぬけ出すことができました。

吉次郎　「なんとか大日さまを無事おすくいもうしたぞ」

弥四郎　「あのはげしい火の中から、ようおすくいしたものじゃ」

吉次郎　「これもなき秀吉さまのおかげだ」

ともの者1　「さあ、大日さまをお守りしてどこか安全なところにまいりましょう」

ナレーター　「安全なところといってもどこへ行ったらよいものか」

弥四郎　弥四郎の頭には、相模の国の星谷寺がうかんでいました。

吉次郎　「そうだ、相模の星谷寺へ行こう。秀吉さまゆかりの寺だ」

ナレーター　星谷寺は小田原攻めのとき、秀吉が陣にした寺でした。

ともの者2　「あそこならきっとたすけてくださるにちがいありません」

吉次郎　「さ、一刻も早くまいりましょう」

ナレーター　この時代、いくさにやぶれた者たちはくまなくさがしだされ、とらえられました。弥四郎一行も大坂方と気づかれないように、身をやつしての旅をつづけなければなりません。大日さまをおさめたおずしをせおって東をめざしたのでした。

ともの者1　「ああ、重くてたまらぬ。ひもが肩にくいこんで血がにじんできた」

ともの者2　「さあ、こんどはわたしがせおいましょう」

ナレーター　人目をさけての一行の旅は、それはそれはなんぎなものでした。めったに人の通らぬけわしい峠をこえて、ある海辺を通ったときのことでした。

吉次郎　「弥四郎さま、みなつかれきっております。大日さまはお守りせねばなりませぬが、このままでは相模の国までたどりつけるか心配です」

弥四郎　「そうだな、みなここまでよくがんばってくれた。しかし先はまだ遠い。ではこうしよう。大日さまの台座だけでもどこかへおかせても

らうことにしようか」

ナレーター　大日さまは蓮華座という蓮の花のかたちをした台座の上にすわっていらっしゃいました。これだけでもかなりの重さです。

吉次郎　「しかしおいていくといっても、いったいどこへおけばいいものか」

弥四郎　「そうだ！いい考えがある。さいわい海の近くだ、この海の中へ台座をしずめさせてもらうことにしよう」

ナレーター　一行はしずめられた台座にむかい、どうかおゆるしくださいと手を合わせるのでした。

台座がなくなった大日さまのずしを守って、一行はようやくのことで無事に相模の国・星谷寺にたどりつくことができました。そして、ここ、座間・河原宿の地を開拓し、お堂をたてて、大日さまをおまつりしました。

弥四郎　「大日さまもこれでひとあんしんだ」

吉次郎　「そうですが、たいせつな大日さまがぬすまれるようなことがあってはなりませぬなぁ」

弥四郎　「それでは、ずしのとびらにかぎをかけるとしよう。そしてずしに手をかけたりするとかならずわざわいがおこると、皆にようく言い聞かせよう」

ナレーター　それ以後、この言いつたえはかたく守られてきました。開かずのとびらのずしをまつった大日堂を、河原宿の人々はずっとお守りしてきたのです。

町の人1　時はうつり第二次大戦がおわって、しばらくたったころのこと。

町の人2　「世の中もかわったことだし、どうだここらあたりでいっぺん、ずしのとびらをあけて大日如来さまをおがんでみたいものだが」

「いやあ、それはどうかな。あけてなにかわるいことでもあったらどうする」

町の人3

「まあそのときはそのときだ。ただお顔をおがみたいだけじゃよ」

ナレーター

人々はおそるおそるおずしのとびらをあけました。

するとどうでしょう！そこにはなんともやさしいお顔をした三十センチあまりの青銅（せいどう）の大日如来（だいにちにょらい）さまがすわっていらっしゃったのです。台座（だいざ）のない大日（だいにち）さまは火にやかれたようにまっくろなおすがたでした。人々はおもわず目をつむり、手を合わせておがみました。

その後ふたたびずしのとびらにはかぎがかけられ、現在（げんざい）でも河原宿（かわらじゅく）の人々がたいせつにお守（まも）りしています。

注　ずし（厨子）とは、仏像などをおまつりしておく仏具で、両開きのとびらがついている。